

## 平成17年度大学情報化職員研修会に参加して

加藤博之

### 1. 大学情報化職員研修会について

本年度の当研修会は静岡浜松の浜松グランドホテルにて開催された。2泊3日の合宿研修（平成17年10月5日～7日）であった。例年、参加者には参加要件として事前レポートの提出が義務づけられている。本年度の参加者は235名でその内訳は大学96校、短期大学1校、一般企業7社であった。北は北海道の札幌大学から南は九州の崇城大学まで文字通り日本全国の大学からの参加者があった。当研修会の運営団体は私立大学情報教育協会、通称「私情協」である。私情協は私立大学職員にとっては非常に馴染み深い団体ではあるが一応紹介しておく。私情協は平成4年6月1日に文部省の外郭団体として設立発足した公益法人で、私立の大学・短期大学・高等専門学校における情報教育の振興・充実を図るために設けられた団体である。当研修会以外にも大学情報化基礎講習会、事務部門管理者会議、学内LAN運用管理講習会といった研修会・講習会を開催している。

私情協については同協会のホームページに事業内容、研修の開催について詳しく掲載されているので詳細については割愛する。

（私情協ホームページ：

<http://www.juce.jp/index.html>）

当研修会は研修の趣旨を理解するための全体会（講演、事例解説等）の後、テーマ別の分科会に移行するという形で進められた。分科会は、趣旨に沿って分科会ごとに予め用意されたサブテーマの内容を中心に討議を行い、問題解決のための方途を探り、必要に応じて参加者の中から、あるいは外部関係者を招いて先進的な事例の紹介を行う、というものであった。

ちなみに分科会ごとに設けられているサブテーマは参加要項で事前に周知されており、事前レポートもこのサブテーマに沿って自分の参加目的などを述べるものであった。

以下、全体会→分科会という当研修会の実際の流れに沿って当研修会についての報告を進め、最後に当研修会について思うところを述べたいと思う。

### 2. 全体会

全体会では3人の講師の先生方から講演が行われた。その中でも2人の先生の言葉が印象に残ったので紹介したい。

まず、1つは研修委員会委員長である山田憲男氏（日本女子大学）の講演で『Creativeな仕事をしているか?』という内容であった。話の内容を要約すると「言われたことを間違いなくすることも重要だが、そういう人材は派遣社員のほうが優秀といえる。Creativeとは意欲、企画力、知識、調整能力、人間的魅力をもつ人材である。壁にぶつかった時にできない理由を『だれそれが聞いてくれない』とするのはそれによって自分の実力不足をさらけ出しているのだから『聞いてもらえない自分』に責任があると考え『聞いてもらえる』強い職員にならなければならない」といったものであった。これからの事務職員に、自分から企画しアクションを起こして道を拓く「創造性」を強く求められておられた。

もう1つ目は私情協の井端先生のお話で、講演内容を一部そのまま紹介すると、「大学というところは人材を育成できなければ社会に貢献できていない。貢献できなければ税金でチャンスを与えられる資格はない。『高いお金の割に人材を育成できてないじゃないか!』というのが今の社会の評価であるということを実感して業務に取り組んでいただきたい。」というものであった。

厳しいお言葉であったが、大学は高い授業料と国民の税金で動いている部分が大きいのでそういった社会からの声は当然だと思った。社会に貢献できない大学は淘汰されていくという、現在の大学を取り巻く環境はますます厳しさを増すのだろうと思った。

### 3. 分科会

全体会が終わった後、参加者は各分科会に分かれて研修を進めた。

私は「教育学術情報」の分科会に参加した。

当分科会は21名の参加者があったが、実はこの21名のうち一般企業から参加の3名を除いては全員が図書館職員であったのでこの分科会は「図書館分科会」と呼んだほうがわかりやすいかもしれない。

当分科会のテーマは1つのメインテーマと3つのサブテーマが用意されており、箇条書きにして示すと次のようなものであった。

#### メインテーマ

教育支援のための学術情報サービスについて  
サブテーマ

- (1) 求められる情報提供の在り方について
- (2) 教育を支援する高度サービスについて
- (3) 図書館サービスの法律問題について

分科会が行われた後半の2日間の研修は上記のメインテーマを念頭に置きながら、このサブテーマを(1)、(2)、(3)の順序に従って進めていった。

以上が2日目からの教育学術情報分科会の概要である。続いてサブテーマ(1)、(2)、(3)の順に話を進めていくこととする。

#### (1) サブテーマ(1)

「求められる情報提供の在り方について」

このサブテーマの中では激変する情報資源とその整備について研修を進めた。

学術リポジトリをどう考えるか、教育・研究にどのような情報インフラが必要なのか?ということについて話し合った。

このサブテーマにおいては運営委員である植田英範氏(国士舘大学)のお話が強く印象に残った。

植田氏の主張は「もう単館開発をしておればいい時代は終わっているのではないか。」というものであった。

植田氏の主張はまず、日本と欧米での図書館=情報センターの現状を比較するところから始まった。

植田氏は『現在早大も慶応も東大もスタンフォードにはかなわない。日本の図書館はどんどん欧米に負けている。このままデジタルデバインドがそのまま機関デバインドに移行する。そうなれば日本の教育力が落ち、ひいては日本の国力が落ちていき衰えていくのだ。』と話されていた。

私自身も最近の傾向として日本の論文が海外メデ

ィアでどんどん発表されて日本の頭脳が海外に流出しているという話を聞いたことがあったのでこの話はそれを裏付けるものだと思えた。

それに対する方策として植田氏が述べられたのは次のようなものであった。箇条書きにすると、

- 大学図書館共有の図書館蔵書資料検索サイトを作成する。ユーザーからすれば自分の欲しい資料・情報を調べるにはこのサイトさえ見ればよいということになる。このサイトを中心に各大学図書館をネットワークでつなげていく。
- この横断検索サイトが検索するのはすべてのデータベースである。具体的にはOPAC、他の大学のDBはもちろん、その他のmultimedia DBなども含むものである。これには外部のWeb databaseもつなぐシステムを実装する。こういうシステムを採ることによって、ユーザーはあらゆるデータがあたかもこの一箇所のサイトにあるように利用することができる。

というものであった。非常に興味深い話であったが、紙面も少ないうえに少し専門的な話であったので残念ながら私の力量では正確な報告はできていないかもしれない。植田氏は勤務されている国士舘大学図書館において「K i s s」という、この構想に基づいたウェブサイトを実際に作成されているのでこのサブテーマについて関心の強い方は是非このサイトを訪れ私の報告内容での足らずの部分の補完し理解を深めて欲しい。アクセス数が増えることについては植田氏もやぶさかではないと思うのでお許しただけと思う。

#### (2) サブテーマ(2)

「教育を支援する高度サービスについて」

このサブテーマにおいては教育支援と融合する高度情報サービスについて話合った。中でも次の3つの大学の話が印象に残った。

まず1つは学習院大学のケースで、学生の参加率の高い図書館セミナーの紹介があった。

具体的には①OPACセミナー(文学部ドイツ学科では必須単位であり、レポート提出も義務付けられているもの)、②日経テレコン21セミナー(講師を招いてセミナーを実施するもの。『どう就職活動に役立たせるか』を解説)、③卒論追い込みセミナー、の3つのセミナーが他に比べて非常に参加率が高いとのことであった。

ここからわかることは、ただ単なる教養セミナーではなかなか学生の集客は難しいのだということ

あった。日経テレコン21の就職活動支援セミナーなど、直に学生が得をするものでは集客率が高かったのが良い例であると思う。

2つ目は明治大学のケースである。同大学ではゼミ単位セミナーを年間100回くらい実施している、とのことであった。セミナーの内容は、開架エリアを回り、そのゼミの内容に関係する書架を案内する、というものだということであった。同大学担当者の話から教員同伴形式のセミナーは学生も真剣になるのだ、ということも分かった。ちなみに同セミナーは500名近くの学生が受講し、図書館活用法（2単位）という授業において行われている。講義の担当も図書館員半分、教員半分だということで、講義に出張する際、図書館員は専任講師という資格を人事課より与えられ、授業を行っているとのことだった。

3つ目は国際基督大学のケースで、DBガイダンスの前後にアンケートをWeb上で行き、セミナー後の習熟度をチェックしている、とのことであった。ただセミナーを行うだけでなくフィードバックも考えておられるのが印象に残った。

各大学の事例を聞いて、特に学習院大学の『日経テレコン21』というビジネス情報データベースと「情報収集力」が成功の鍵の一つである就職活動を融合させ、時期に投ずるガイダンスを実施している取り組みは素晴らしいと思った。

研修の中でも、「図書館と就職部で共有予算もとれるのではないか。」「就職部は『面接に強くなるセミナー』というように広報をして、図書館は四季報をただ紹介するのではなく、『経常利益の過去4年間の流れはこうなっている』とか『他の企業と比較してこの企業のこの部門は第〇位です』というのがわかる、というような掘り下げた説明をすればよいのではないか」という議論が行われた。

### (3) サブテーマ(3)

「図書館サービスの法律問題について」

このテーマにおいては情報サービス部門のコンプライアンスについて研修を進めた。

まず現状の問題点を洗い出すと次のような問題点があることが次々にわかった。アウトソーシングに任している夜間中、ディスプレイに表れている個人情報が見える状況があるのではないか。閲覧・貸出情報が長期保管されているシステムは個人情報保護の見地から問題なのではないか。館内での個人宛の図書到着のお知らせの貼出しはやめるべきではないか。卒業アルバムの取扱いはどうするか。個人情報

の明文化ができていないかなど、このように現在の図書館には多数の法律問題が内在していることが分かった。

ここでは運営委員の村岡氏が述べられていたアドバイ스가印象に残った。

村岡氏によると、著作権は経済権であり、お金を払うもしくは、話し合いの場を持つことで揉め事を回避できるケースが多いのでそのように進めてみてはいかかが、とのことであった。また、個人情報については、要るか要らないかわからないものは捨てるのが大事だと述べられていた。捨てずに長期保管するものは、放っておくと管理がずさんになるので、本当に要るものなら「いついつまで保管する」と決めることが大事だとのことだった。

## 4. 最後に

この3日間の研修を通じての私の思うところを述べていきたいと思う。

まず、今回私が派遣していただいた、この大学職員情報化研修会も含め私情協が開催する先述の研修会について共通して言えることが3点あると思う。

1つはこれらの研修が私立大学による私立大学のための研修であるので取り上げられるテーマが自分たち自身の問題に直結しており、研修期間中は最初から最後まで無駄がないということである。自分の知っているテーマについては理解が深まり、たとえ現段階で理解ができないことではあっても持ち帰って今後の課題とする価値があると思う。2つ目は参加者のほとんどが私立大学の職員であるので他の研修会よりも互いに親近感があるということである。つまり他大学に知り合いを増やすことができるチャンスが多い、ということである。3つ目は情報化研修とあるので研修のメインテーマはもちろん「情報」に置かれてはいるが、ただ単にIT関係の知識の研修内容となっているのではないということである。つまり「情報」をより良い大学運営のための一つのツールとしてとらえて、では今後の大学運営において我々事務職員がどういった教育支援、学生育成支援、大学の改革といったものを進めることができるのかという広い視野でのテーマで研修プログラムが用意されているということである。

次に今回の研修そのものについての感想を述べたい。

この研修を通じて図書館間の交流や一致団結とい

った横方向の強化、そして個々の図書館職員の専門性の向上といった縦方向の強化がこれからのチャレンジすべきテーマだと感じた。

横方向の強化については図書館間の横の連携、つまり協力体制を築くことがこれからのテーマであると思う。

現在は大学間の競争が激化している時代ではあるが、蔵書スペース問題や年間予算が減額されていく中で図書の価格が高騰するといった問題に直面して現在PULCなどの連合体ができてきている。

東京の諸大学の話を聞くと、東京のように密集して大学がある都市では歩いていけるところに大学があるので「もし探している資料がなかったら隣に歩いて借りに行けばいいじゃないか。」という発想があり、地域での協力態勢の強さ、強くなる可能性を感じた。図書館相互協力の感覚が近畿とは少々異なるのかもしれないと感じたが、近畿圏でも今年度本学も参加している近畿図書館イニシアティブなどが発足し、そういった活動はこれからますます活発になっていくと思われる。

縦方向の強化としては図書館員一人一人の専門能力の向上がこれからの課題であると思う。

先に明治大学の図書館員が専任講師として講義を受け持っているという話を紹介したが、アメリカでは図書館司書になる人は普通、修士号をとり、更に図書館情報学大学院で学び、図書館員となってからは教員職員として教壇にも立ちながら現場の仕事をこなすということである。アメリカでは子どもに「将来何になりたい?」と聞いた時に「消防士になりたい」とか「ピアニストになりたい」とか、そういったものと同様に「図書館司書になりたい」というのが一般的によくあるそうである。またアメリカのおもちゃ屋に行けば警察官や消防士の人形という日本にもよくあるフィギュアにまじって図書館司書のフィギュアなんかも売られているということである。それほど図書館司書という仕事が親しまれており、社会の中で頼りにされており、存在感があるの

である。

日本はそういった環境を整えていくことは現段階では難しいと思うが、図書館司書の担うべき職務のクオリティについての意識は日本の図書館も少なくとも同じものを持つべきであると感じた。

少し話がそれるが、分科会の中で、長らく図書館の外で働いていた方が管理職として図書館で勤務するようになって気が付いたことを述べられていた。その方は「図書館はもっと広報に力をいれるべきだ」と言われていた。図書館員一人一人は大変勤勉で黙々とまじめによく働く人が多い。だから図書館のもつクオリティは現在でも非常に高い。だが、そのクオリティの高さを外部の人間は知り得ていない。知られていなければ図書館の評価は上がらないとおっしゃられていた。図書館はこれから外にももっと働きかけていかなければならないと思った。

最後になるが、情報に関するテーマを話し合い、これからの図書館、ひいては大学にとって情報というものが如何に重要であるかということの認識を深めることができた。電子ジャーナルや学術データベースのように我々に大きな恩恵を与えてくれるものもあれば、個人情報のように取扱いを誤ると図書館だけでなく大学そのものの信頼をも失墜させてしまいかねないものもある。こういったものは、近年ドッグイヤーという概念が登場した通りあるべき理想像目指して今から研鑽を積んでいこうというような時間のゆとりはなく、今現実になるべく早急に対応していかなければならないと感じた。図書館が今、何を求められていて、何をしていかなければならないのか? そういったことを考えさせられた意義深い研修であった。

このような研修に派遣させていただいた関西大学にこの場を借りて謝意を述べるとともに、日々努力を重ねて投資していただいた以上のものを還元したいと思う。

(かとう ひろゆき 運営課)